

道徳部会

<県研究主題>

生きる力としての豊かな人間性をはぐくむ道徳教育の指導および評価の工夫改善

提案 1

<研究主題>

児童が自ら課題に取り組み、他と関わりながら自ら考え生きようとする道徳教育の充実
～資料提示を工夫した道徳の授業～

1. 提案内容

(1) 川崎市立道徳教育研究会の研究について

川崎市立小学校道徳研究会は、平成 26 年研究主題「豊かな心をもち、生きる力を育てる道徳教育～心に響く道徳の時間の創造をめざして～」という研究主題を設定し、研究を進めている。教師や学校が変われば子どもや学級が変わり、家庭や地域社会も変わるというような相乗効果を期待し、「生きる力」を培う新しい道徳教育の充実に取り組んでいる。

道徳教育の要である道徳の時間においては、子どもたちが自分とのかかわりで道徳的な価値観をとらえ、それを自分なりに発展させていこうとする思いが培われる学習活動の創造が必要である。心に響く道徳的な時間が展開されるならば、子どもたちは道徳の時間に温めた道徳的価値を具体的な生活の場面に生かしていこうという思いを膨らませるであろうと考えテーマを設定した。

(2) 研究の内容

- ① 道徳教育の全体計画と推進体制
- ② 道徳の時間における指導
- ③ 魅力的な資料の開発と活用
- ④ 道徳の時間と他の教育活動との関連
- ⑤ 家庭や地域社会と連携した道徳教育
- ⑥ 児童理解に基づく道徳教育の評価

(3) 第一学年の実践〈資料提示を工夫した道徳の授業〉

【主 題】思いやりの心 2－(2) 思いやり・親切

【資料名】ぼくのはな さいたけど (東京書籍「みんななかよく」1年)

【ねらい】身近な人たちに温かい心で接し、相手のことを考えて親切にしようとする心情を養う。

① 資料提示の工夫

主人公トトの温かい心を大切に、それを感じさせるために、紙芝居形式で読み聞かせ、児童の心にしみいるように配慮した。その紙芝居は、授業の中で場面絵としても活用できるようにした。

また、より主人公の気持ちに迫れるように、トトが育てた花が増えたり、減ったりする場面、トトが友達モイラのために花を一本残しておく場面では、パネルシアターを活用し、子どもたちが視覚的に捉え考えられるようにした。

② 役割演技の活用について

トトがモイラのために、一本の花を残す場面で役割演技することにした。役割を交代し、全員がトトとモイラの両方の立場を経験することで、より主人公の気持ちに迫れるようにし、演技の中で自然に出た子どもたちのつぶやきや気持ちを大切にして授業を進めた。

③ 考察

【資料提示の工夫について】

紙芝居を見ながら話を聴きイメージを膨らませていくのも、1年生の児童には、効果的な方法で

あった。紙芝居は、読んだ後に、場面絵としてそのまま活用することができたので、よい方法であった。パネルで花が増えたり、減ったりする様子を表したとき、体を乗り出して集中して見る子どもたちの姿が見られた。また、「お花が増えたね」「ああ、お花が減っていく。」などのつぶやきも多く聞かれ、お話の世界に入り込んでいるようであった。

【役割演技について】

トトがモイラのために一本の花を残す場面での役割演技は、それまでに児童は感情移入できていたので、どのペアもすんなり活動に入ることができた。実際に役割演技をしたことで、モイラやトトの気持ちに近づくことができ、子どもの自然な言葉が出てきてよかった。

【子どもたちの変容について】

授業後の生活では、子どもたちは優しい気持ちを素直に言葉に表しながら行動することが多くなった。例えば重い机を自分から進んで運んだり、給食中におかわりのおかずを「一つ残しておくよ。」と友達に残しておいたりする様子が見られ、生活の中で自分自身がトトになりきって行動に移す様子もみられた。

2. 協議内容

【資料提示の工夫について】

- ・ 紙芝居やパネルなど視覚に訴える教材を使うことで、長い読み物資料でも最後まで興味をもって聞くことができたのではないかな。
- ・ 場面絵やキーワードになる言葉を教室に提示して残しておく、子どもたちがお話を振り返ることができ、学んだことを日常生活で行動に移していけるのではないかな。価値を子どもたちの心に浸透させることもできる。

【役割演技について】

- ・ 日頃から先生が子どもたちに優しく接している学級経営が、児童の言動に表れている。役割演技から、トトやモイラの気持ちに共感する言葉が多く聞かれた。

【発問について】

- ・ 今回は、トトの優しい気持ちにじっくり共感させる授業展開ではあったが、自分の育てた花を友達がとってしまう、悲しい、くやしい気持ちにふれ、心の葛藤を考える授業展開もあつたのではないかな。くやしい気持ちがある中で、一つ残しておくという思いやりについて、さらに考えていくことが大切だと思う。
- ・ 場面ごと発問をすることで、全体的に発問が多かった。授業の終末で、自分の生活や自分の気持ちを振り返る場面があつてもよかったのではないかな。

3. まとめ

- ・ 1年生だったが、紙芝居を使うことで、資料が手元に無くても内容をしっかり捉えることができていたので、視覚的な教材は有効な手段であった。
- ・ 場面絵に沿ってそれぞれ発問をすると、一つひとつの発問にかかる時間が短くなり、授業が平板になってしまうことがあるので、発問を厳選しじっくり考えたり、話し合ったりする場面を作ることも大切である。

<研究主題>

「命を大切にできる心を育てるために」～昨年度の実践を生かした取り組み～

1. 提案内容

現代社会の中で「生きる力」としての豊かな人間性を育むため、道徳教育の重要性は高まってきている。本校の児童の実態から、お互いを理解し、大切に思える関係づくり、相手との信頼関係が深まるようなかわり方に気付き、実際に行動に表していけるような心を育てていく必要がある。そして、子どもたちの人間性をより一層豊かにするためには、道徳の時間を大切にし、各教育活動が相互に関連し合うように取り組んでいこうと考えた。また、昨年度の実践分析から、①道徳的価値にせまること②日常生活で道徳的価値を深めていくことにおいて課題となった。昨年度の実践を生かし、テーマにせまられるよう実践を行ってきた。

(1) 研究実践

実践授業 4年生 【主題名】ねらい：『命の大切さ』 生命尊重3－(1)

資料名：『チャンプ、きみのことをわすれない』

<道徳的価値にせまる工夫>

- ① 事前アンケートを行うことで、児童の生き物に対する思いや接し方などの実態を把握し、発問や授業展開を考えた。
- ② 昨年度と同様の資料を扱うことで、昨年度の実践を生かし、よりねらいに迫るための発問を考え、授業の流れを組み立てた。
- ③ 自分に振り返る時間を多くとり、理科や学校生活などの実体験を例に身近に置き換えられるように話した。

<日常的に道徳的価値を深める工夫>

- ① 1学期は生き物の命、2学期は自分以外の人の命、3学期は自分の命について考えていき、1年間継続してあらゆる命を大切にしようとする心を育めるようにした。
- ② 授業の内容や子どもの発言を学級通信に載せて家庭に発信し、学んだことを子ども同士や家庭とも共有できるようにした。
- ③ メダカやモツゴなどの生き物の飼育について学級で話し合ったり、ふりかえりをしたりすることで、継続的に命を大切にできる心を育てられるようにした。

(2) 成果と課題

- ふりかえりシートに書かれた内容から、命を大切にしている様子が伝わってきた。
- 生き物のよりよい飼い方をインターネットや本で調べたり、店に行き店員に聞いたり、進んで行動する子どもがいた。
- 学校だけでなく、家でも生き物の世話をする回数が増えた。
- 授業前の事前アンケートやふりかえりシートを書かせたことによって、子どもたちの考えの変容を見ることができ、今後の日常での子どもたちへの関わり方の参考になった。
- 生き物を大切にすることを考えていく中で、人の命についてふれている子どもも出てきた。1学期のふりかえりを2学期につなげていきたい。
- より継続的に日常生活や他教科との関連をさせ、子どもたちの意識が高まるような働きかけが必要である。→生き物を飼うことに反対意見を持っていた児童への対応
- 授業で死を取り扱う際、教師側が子どもたちの発達段階や実態をよく把握した上で、ねらいと意図を

しっかり考えておく必要がある。

2. 協議内容

(1) ねらいにせまる発問

- ねらいにせまるためには、①場面②価値基準③資料のどれを大切にするのがポイント。
- ねらいを吟味して、発問を考える必要がある。
- 「どうして」という問い方だと結果だけが出てきてしまう。三浦さんとチャンプの関係を一つひとつおさえていくことで、三浦さんにとってチャンプがかけがえのない存在であることがおさえられる。
- 価値項目3-(1)にするには「安楽死させた方がチャンプのためではないか」という投げかけをすることで、生きていることが大切という言葉を引き出したのでは。(代案)
- 「生き物を大切にしたことありますか」という発問から、「いつかはみんな死んでしまうけれど、一生懸命、今を生きていることはありますか」というような発問に変えることで、自分自身について考える時間を作り、ねらいとした価値にせまることができたのではないか。安楽死は人間による選択であり、命を丸々と受け止めて育てていこうと選択した三浦さんについて「なぜ三浦さんが生かしていこうと考えたか」という発問をすることで、今を生きる自分とつなげることができたかもしれない。
- 三浦さんの気持ちを考えさせる3つのポイントを変える。

(2) 授業について

- 学校として各学年の教科領域と道徳との関連が別葉に書かれていてとてもよい。
- 子ども達は「お世話をする」というように動物愛護(3)-2の視点が強くなっていた。
- 「命がなぜ大切であるか」について考えることで、「だから生き物を大切に」という方向に繋がる。
- 計画的に行い、学級経営に生かされていた。実践はとても良かったが、1学期に自然愛護になっていたため、扱う時期を考える必要がある。犬と魚は違い、命は責任ではなくなぜ大切かが大事。
実践例『自分の健康』についての実践では、自分の命は自分だけのものではない。力強く生きようという視点で行った。
- 今回の提案であつたら、自分の命についてのアンケートがあつても良かった。

3. まとめ

- リフレクション(ふりかえりの大切さ)とふりかえりの視点が大切。昨年度からのリベンジが強く、昨年と比較し課題を繋げていくことが素晴らしい。また、先生自身が思いを持って取り組み、子どもの考えや思いなどを真摯に受け止めることができていた。
- 子どもたちに対する自分の思いから、目の前の子どもたちにとって一番効果的な切り口(価値)とは何かを考え、資料を見つけていくことで価値に繋がる。主題は、ねらいと資料から構成されているため、ねらいの価値をはっきりさせることでより授業が充実する。
- 一年間かけて先生が意図を持ち、継続的に行っていることが大切。“どんな命でも”の“どんな”の3文字がとても大切。道徳の時間で考え、子どもたちが主体的に考えていくことが大切。体験が乏しい子どもたちだからこそ、先生が考えるきっかけを与えていく必要がある。
- 今後、一年間かけて子どもを見取り、繋げていってほしい。反対意見を持った子どもたちが3学期にどのようなふりかえりを持つか楽しみである。